九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

漢語資料の用字に関する研究

詹, 瑋

https://hdl.handle.net/2324/2348714

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	詹　瑋
論　文　名	漢語資料の用字に関する研究
論文調査委員	主　査　九州大学大学院芸術工学府　教授　鏑木時彦 副　査　九州大学大学院人文科学府　教授　久保智之 副　査　九州大学大学院芸術工学府　教授　矢向正人 副　査　九州大学大学院芸術工学府　名誉教授　板橋義三

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

従来、歴史的に中国と交流国との間での漢語資料に使用された用字に関する研究は、周辺国との関係が存在したため、その外国語や中国語で書かれた関係史、交流史などが多く存在し、そのもっと基礎的なレベルである音声・音韻的研究はある程度存在している。

琉球王国との人的交流については 14 世紀の明代から始まったとされる、その資料は両国に存在していても、その音的研究については活発に行われてこなかった経緯がある。現在でも部分的な研究は存在しているが、本博士論文で見るような多種類の資料（中国の官話、官話方言、地域方言）を扱った研究は皆無である。それぞれの音的解釈、刊行時期の不明確さ、地域方言の複数性、冊封使の存在、記録者などの問題があるが、特に官話テキストや官話方言、地域方言の音声・音韻論の解釈に踏み込んで、果敢に取り組んだ包括的研究はあまり多くない。実際に、先行研究が十分説得力のあるものはあまりなかった。そのため、明朝から清朝にかけての中国と琉球王国との交流史に使用された用字の音声・音韻的内容の包括的把握とその全体像の十分な解明が必要であるとし、その意味では大変野心的論文である。従来の言語研究は通時的側面と共時的側面を区別して研究されてきたが、本博士論文では、琉球と中国との交流の史的資料の異用字法を原点に据え、漢語官話、地域方言、琉球語の通時的変化も考慮してその都度必要と見られる両側面を重視した、異なった方法論を採用している。

本博士論文は序章から終章まで８つの章からなっており、ここで取り上げるのはその中心的内容となる第１章から第６章までについてであり、評価を含め解説する。

第１章では研究背景と研究の目的について述べている。琉球王国の歴史と中国の明朝から清朝までの 500 年の交流内容について概説し、特に琉球と中国との交流における言語接触に焦点を合わせて述べている。明代から清代に移行する際に官話に使用されたとみられる方言が南方方言から北方方言へ移行したことを見出した。

第２章では先行研究とその問題点、そこから構築できる本稿の位置づけについて概説してある。従来の研究の方法論としては資料の作者の同定、成立年代、継承関係などを解明する考証学と、資料の内容の解読にかかわる研究である交渉学の２つがある。それに対して、本論文では音声・音韻の比較対照研究の考え方を取り込み、上記の問題点に解答を与え、進めるとした。官話テキストと官話資料に関する先行研究とその問題点にも深く議論し、従来の先行研究の問題点を浮上させた。特に琉球における官話教育の環境について琉球通事を通じて記録者の方言や言語背景なども掘り下げた。

第３章では、研究対象と研究の具体的方法論について述べてある。現存する７冊の異なった

官話資料を使用し、著者、言語背景などをそれぞれその資料の言語的特徴から割り出した。調査対象の異なる語彙数は 170 となり、その 1 つ 1 つについて丁寧に調査研究した。比較対象に選定した官話、福建官話、福州官話であることを見出し、用字の子音・母音の体系を策定した。そこから明代から清代の福建語と福州語の用字の子音と韻部（母音を中心とする部分）の音声体系をそれぞれ構築したものを吟味し、複数の研究者の成果を参考にしながら、最終的な音声体系を確定した。

第 4 章から第 6 章までは調音音声学の理論に基づく寄語（琉球語の音価を表す対訳の漢字語彙）の音価分析を行っているが、この複数の章が本稿の中核をなすものである。第 4 章では部門は天文と地理を扱い、50 語を収録している。第 5 章は時令、宮室、器用に関する部門の語彙、61 語を取り上げている。第 6 章では人物、人事、衣服、飲食、身体、陳賓、通用の 7 部門の語彙、58 語を分析している。この音価の同定作業は非常に集中力が必要とされ、1 つの提示語に対して琉球語のカタカナ表記と音声表記、ローマ字表記、その所蔵場所、資料名とそこに記された漢字語の音価を同定し、官話、福建官話、福州語における漢語も特定する。それぞれの語彙の音価を特定したのち、その語がどのような特徴を持っているのかによって分類した。このようにして完成した分類法は本邦初であり、ここで取り上げた語彙は非常によく分類できている。

その用字法の分類として、音節分離、音位転換、子音挿入、唇音化、融合、二重母音・長音節、入声促音節の対応、モーラ数対応、摩擦音化、三母音化、を挙げ、用字の分類を行った。この分類に至るにはそれぞれの単音の音価を決定しなければならず、その作業自体が非常に困難である。それをさらに語のレベルまでに音価を同定させるにはさらなる困難があることが理解できる。その点でも地道な作業が必要となるものであるが、本稿の確定はその賜物である。最後に異用字の理由も明らかにし、説得力のある説明をしている点も大変評価できる。

それぞれの審査員からの本博士論文に対する評価は非常に高く、詹瑋さんの長期間にわたる研究成果を総括・発展させた内容となっている。本論文は、琉漢言語接触という歴史的琉球語学に対する貢献は非常に高く、日本語学、ひいては歴史言語学を大きく進展させた、貢献度の高い論文であり、資料的価値も非常に大きく、学位（芸術工学）論文に相応しいものであることを確認した。